

<序文>

愛知県半田市は江戸時代より酒造りを中心とした醸造業と、その主な産品である酒・酢・焼酎などを江戸を主な市場として運ぶため、早くから海運が発達した地域である。

半田市の中心部を流れ、衣浦湾に注ぐ半田運河(十ヶ川)沿いには醸造の蔵が立ち並び、現在でも、ミツカングループの黒堀の工場が当時の姿そのままに残されているなど、当時の様子が伺える。



明治時代の半田運河の様子(尾陽商工便覧より)と現在

<水害との歴史>

半田運河(十ヶ川)は、知多半島最大の河川・阿久比川に近接平行して流れる河川であるが、阿久比川が中流部では完全な天井川であるため、阿久比川の排水路としてつくられた運河である。

(別図1 阿久比川全域図)(別図2. 現在の半田運河)

安政元年(1854)11月の地震・津波により、当時の半田村は大きな被害を受けた。また、翌年の安政2年(1855)8月には暴風雨・大洪水に襲われ、阿久比川の濁流は近隣の村落(阿久比輪中・岩滑)を丸呑みにして、最下流の下半田までを襲う。

この時の大水害で海への排水が問題となり、阿久比川上流の英比諸村・岩滑村と交渉して山方新田を切開する。

阿久比川の氾濫を防ぐためには、安政期よりも以前から繰り返し大規模な土木作業が行われてきた。

元禄時代には、小栗三郎左衛門・小栗七左衛門らによって山方新田を築き、阿久比川の流れを東へ変えることによって、洪水を防止しようとしたが、以来数回に渡って半田村は泥海と化しただけでなく、港の内部も年々土砂に埋まった。

※山方新田は元禄4年(1691)に海岸を埋め立て、元禄8年に半田池の水を引いて水田として開発したところ。宝永2年(1705)の検地によると、40町歩余りの面積があった。

安政の大工事では、山方新田に幅18間(約32m)、長さ315間の水路を切り開いて船江とし、元禄以来東方へ流出していた十ヶ川をここに注がせる大工事を短期間のうちにやり遂げた。これによって、半田村の排水と船の出入も便利になった。

※阿久比川・・・知多半島の中央部東浦町を源として、阿久比町・半田市を南下して衣浦湾に注いでいる。知多半島最大流域の二級河川で、延長9965m、流域面積は31.0km²あり、支流に矢勝川・前田川・福山川・草木川をもつ。

※ 十ヶ川(半田運河)・・・近接する阿久比川の排水路としての役割をもち、東部に位置する支流・英比川と合流し、衣浦湾に注ぐ延長5250m、流域面積8.6km²の小内水河川である。

水系	河川名	延長 (m)	流域面積 (km ²)
阿久比川	阿久比川	9,965	31.0
	矢勝川	5,040	8.5
	前田川	2,620	2.6
	福山川	1,414	4.1
	草木川	3,000	5.3
十ヶ川	十ヶ川	5,240	8.6
	英比川	400	1.6

尚、十ヶ川は架かる橋を基準に以下の4つの区域に分けることができる

(1) 上流河道

前田川サイホン上流側で、川幅3～4m程度の小河川。右岸側は阿久比川の堤防となり、左岸側は無堤河道になっている。

(2) 中流河道

矢勝川サイホンから前田川サイホンの間で、川幅6～7mであったが、整備された後は川幅10～12m程度に拡幅されている。上流河道と同様に、左岸側は無堤河道になっている。

(3) 下流河道

矢勝川サイホンより下流部で、河川区域(法河川始点)となる新橋まで。川幅は約20mで、この流域より半田市になる。

(4) 港湾区域

新橋から下流の半田湾入り江までは港湾区域で、川幅は20～40m。高潮対策のため、半田水門(防潮水門)が設置されている。

(別図3. 十ヶ川エリア地図)

幾度となく繰り返された土木工事により、水害対策に対処してきたように思われるが、もともと阿久比川が天井川という性質上、戦後も河川流域の整備は行なわれてきた。特に昭和34年(1959)の伊勢湾台風の水害後、水門・防潮堤・護岸が近代的に整備され、かつての風景とは一変することになる。

風景を代えた大きなポイントのひとつとして、十ヶ川が生活区域と分けられた点にある。川の近くに行けば川面をみることは当然できるのだが、防潮堤の存在が人を川へ近づくのさえぎるかのように存在する。また、物流構造の変化として、船で荷を運んでいたものがトラック輸送に変わったのもあるが、新たに下流部に設置された水門によって、船の航行ができなくなったのは大きな変化である。かつて漁船や荷物の運搬船で賑わっていた運河周辺は、今や一隻の船影さえ見ることができない。水辺の風景としてこれほど寂しいものはないのではないかと？



(明治時代と現代の様子 現在は水門より上流では船が入れない)

<水質悪化と護岸の大規模改修>

永い歴史を持つ半田運河も、長年の生活排水等の流入によって汚泥が堆積し、そのため悪臭を放つのでますます住民は運河に近寄ることを阻害してきた。また、伊勢湾台風後に整備された護岸が老朽化してきたこともあり、「衣浦港半田運河整備計画」が策定された(事業実施期間 平成3年7月～平成13年3月、事業費1,605百万円)。

※ 衣浦港務所の担当官によれば、870万円とのはなしも

整備計画の内容は、護岸の補強・汚泥の除去・遊歩道の整備が主なものであった。

護岸の補強は、半田水門から上流へ700mの区間を、黒板塀の醸造蔵の景観を損なわないように、自然石による石積みとし、白色系の花崗岩で黒塀の蔵とのコントラスト的な調和を図った。

源兵衛橋から新橋の間では、化粧型枠による擬石コンクリートで護岸補強を行なった。

運河の汚泥除作業においては、運河が市の中心地に位置することから、汚泥を運搬船に積み込む際に悪臭が漂わないよう、排砂管を運河の外まで延長し、汚泥の積み込みを行なった。

(別図4. 運河工事平面図)

(別図5. 運河工事断面図)

汚泥の除去作業後、住民ができるだけ水面に近づけるように護岸を3m前出しし、これも黒塀の蔵の景観を考慮し、街路樹と木製デッキにより遊歩道の設置計画がされた。昔ながらの風景を残し、水辺空間を人々が楽しむことができるための配慮であった。

当時の整備計画を案内したパンフレットにこのようなうたい文句がある。

“運河が導く歴史ロマン そんなロマンを訪ねる散歩道「黒蔵の道」”



(ボードウォークイメージ)

しかし、実際には木製デッキによる遊歩道はコストが高いとの判断から、石張りの遊歩道に変更された。この整備計画は全日本建設技術協会 21世紀「人と建設技術」賞を受賞しているが、当初意図していた住民の憩いの場所としての目的は果たせられたのであろうか？

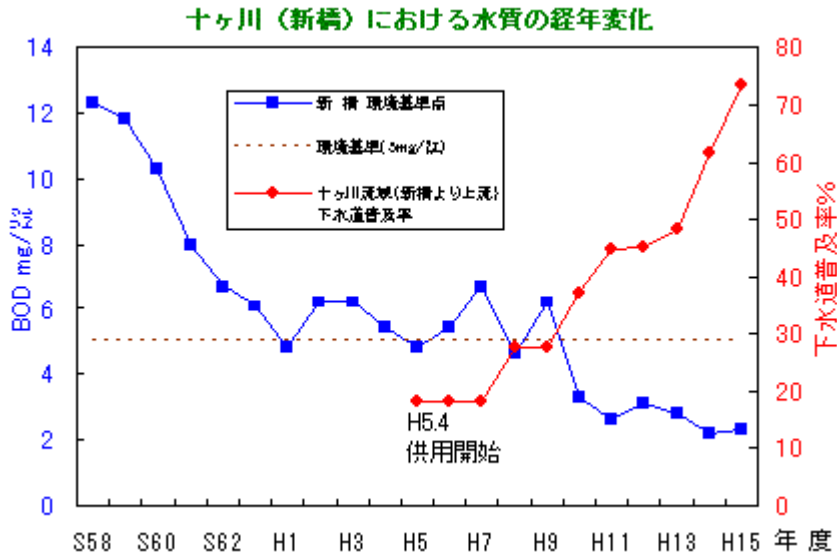
これが現在の運河周辺の様子である。きれいに整備はされているが、どこかもの寂しい。人がいない時を見計らって撮影したのではなく、いつもこの様子なのだ。



<住民の意識の距離>

半田運河のイメージを人々に聞くと、決まって帰ってくるのが「川が汚い」という返事だ。魚などの生き物はほとんど生息していないのではないか？というのが素直な感想である。

生活排水等の影響から、水質が極端に悪くなった時代があった。しかし、現在は排水への住民意識も高く、近隣の工場からの排水基準も守られている。汚泥の除去も行なわれた。本当にまだ川は汚いのだろうか？



グラフは、左縦軸の青色が水質(BOD)、右縦軸の赤色が下水道の普及状況

環境基準点: 水質汚濁状況の把握が可能として指定された地点

環境基準: 守るべき水質 (mg/リットル)

河川流域とは、降った雨がその河川に流れ込む地域

場所によって異なるではあろうが、下水道の整備が進み、実は水質はかなり改善してきていることが伺える。しかし、住民が抱く半田運河の汚いイメージはどこからくるのだろう。

阿久比川や半田運河を昔から知る人にとって、整備されて改善されたからといって、確かに昔のような自然豊かな風景ではない。

ここで、平成16年8月に行なわれた「第3回水みず探険隊」の様子を紹介しよう。「水みず探険隊」とは、水の大切さを知るためには、まず身近な水の存在に気付くことから始まるのではないかという試みで行なわれ、第3回目に探検したところが半田運河であった。水辺の活動に興味のある小学生を中心に保護者、地元自然観察会メンバーなど総勢42名にボランティアの運営スタッフが加わって参加。運河上流部から下流部へと移動し、運河の水質や生き物を調べてまわる。

汚いと思われた半田運河は、歩いてみると確かにゴミが捨てられているのが目立つ。運河周辺では缶・ビン・ビニールなどのゴミがみられるのだが、もっとも印象的だったのは、バイク、自転車などの怪しい粗大ゴミが投げ捨てられている様子だった。探険隊終了後に子供たちが書いた絵を見ても、そのことが如実に反映されている。



(子どもたちが書いた絵と、運河のゴミの写真)

では運河に生き物はいるのだろうか？水質の簡易テストでは、以外にもさほど汚れが感じられない。最初は運河に入ることをためらっていた子供たちも、本能的な水遊びへの興味が呼び起こされ、タモを手に予定時間をオーバーして川の中で生き物を探し回る反応だった。生き物は？というと、やはりいるのである。

ハゼ・セイゴなどの魚やエビ・カニ・シジミ、そしてウナギもいるではありませんか？

半田は童話作家・新美南吉の生誕の地として知られ、代表作「ごんぎつね」は教科書でもお目にかかる。地元になさわしくウナギを発見した時には、子供たち以上に大人たちが興奮したものである。

(別図6. 水みず探検隊の様子と採取した生き物)

この水みず探検隊の活動をとおして、半田運河もまんざら捨てたものではないことが証明された。

また、参加した子供たちの意識の中に、「ゴミを拾って川をきれいに」「生き物が住める環境に」という気持ちが芽生えたことが何よりもうれしい。この気持ちが大量の子供や大人たちに広がること。そして川を舞台に何かをしようという行動が今後期待される。

※子供たちが水みず探検隊で体験したことは、2004年11月14日に行なわれた「2004はんだふれあい産業まつり」のステージにて、絵や感想文の発表というかたちで一般市民にも紹介された。

実際のところ、すでに運河を中心に様々な活動が試みられている。

絵画・写真コンテストが毎年開催され、運河に面した黒塀の蔵を写生する人の姿をみかけるし、平成15年より、5月の端午の節句にあわせて、運河沿いに市民から募った鯉のぼりを飾る催しが行なわれている。秋の産業祭りでは、運河を散策路の一部として組み込んでいる。

しかし、これらの活動はまだほんのきっかけにすぎない。なぜなら、本質的に運河を舞台にしたイベントが行なわれていないことと、日常的に運河に足を運ぶ魅力的な要素が欠けるからだ。

人々が集うに魅力的な要素を運河周辺に盛り込むこと。そして運河に集うきっかけとなるイベントを行なうこと。これらのことが、今後半田運河（十ヶ川）を里川にするために必要なことであり、里川化するということは、川と人々の精神的距離を近づけることだと考える。

今後の研究活動については、里川化する具体的な内容・活動について検証・実証していくこととする。

<資料協力>

愛知県知多建設事務所

愛知県衣浦港務所

半田市立図書館

<参考資料>

中埜家文書にみる 酢造りの歴史と文化（日本福祉大学知多半島総合研究所・博物館「酢の里」共編）

MATAZAEMON 七人の又左衛門・新訂版（ミツカングループ本社）

尾陽商工便覧